



Title	Beyond the Poetics of Paranoia : The Postmodern Sublime and Its Residue in Contemporary American Fiction
Author(s)	内田, 有紀
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59880
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	内 田 有 紀
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 2 6 1 4 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	Beyond the Poetics of Paranoia: The Postmodern Sublime and Its Residue in Contemporary American Fiction (パラノイアの詩学を越えて－現代アメリカ小説におけるポストモダンの崇高とその残余)
論 文 審 査 委 員	(主査) 言語文化研究科教授 渡邊 克昭 (副査) 言語文化研究科教授 貴志 雅之 言語文化研究科教 授 青野 繁治 言語文化研究科准教授 畑田 美緒 言語文化研究科准教授 中村 未樹

論 文 内 容 の 要 旨

序章

1950年代から60年代における社会的文化的な大変動に伴い、国家や歴史や社会や自己など、それまで正当化された自律的なシステムとして通っていた「大きな物語」に対する不信感が芽生える。ポストモダンと呼ばれる時代の到来である。絶対的なものは失墜し、あらゆるもの（時間の直線性までも）が相対化され表層化され断片化していく状況において、「個人の生が何か・誰かによって操作されているに違いない」という不安でもって現実をひとつつの調和のとれた枠組みとして捉えるパラノイアは理論的には不可能である。しかしながら先の9.11同時多発テロ以降にも看取されるように、実際には「パラノイアの時代」と言っても過言ではない。このとき考慮に入れるべきはパラノイアの変容の可能性である。

この文脈においてパラノイアと分裂症とは共に病理的症状を表しているのではなく、現実を理解する方法論を指す。後者が断片化し相対化されたポストモダンにおいてイメージやスペクタクルとの戯れに享樂を感じることによって現実感覚の核を獲得するのに対して、前者は「失われた大きな物語」という「大きな物語」に依存し、「他者の他者」を捏造することによって、そのために虜められているという不安に陥るにもかかわらず、癒しや安心感を得る方法である。

とは言え、両者は対立概念ではなく、むしろ表裏一体の関係にある。と

いうのも分裂症的主体がポストモダンのパラノイアの前提となっており、そのためポストモダンのパラノイアが捏造する枠組みには常に／すでに分裂症的痕跡が内在しているからだ。しかしながら、「大きな物語」への不信感を申し分なく持ち合わせている分裂症的主体がどのようにパラノイアという物語を信じることができるのだろうか。本論は、ポストモダンの主体がパラノイアという方法で現実に対する権威を「維持」するにはノスタルジアのメカニズムを介する必要があるということを、現代アメリカ小説作品の分析・解釈を通して、提起するものである。

第1章 約束された「アメリカ」の脱臼——*Leviathan*における「落下」

本章では、Paul Austerの*Leviathan*におけるSachsの落下事故が、彼のパラノイアからの「落下」を暗喩していると提起する。この考察は、Auster作品に頻出する落下のモチーフ分析につながるだけでなく、本論の骨子となる視座、すなわちパラノイアが内包する分裂症的痕跡がそのパラノイアを脱臼する契機についての総括的な視座を提示するものである。Sachsは事故直前に、性的魅力のあるMariaに抱擁されるべく、非常階段の手すりで危険な姿勢をとることで、シミュレーション通りMariaの（介添えの）抱擁を得る。しかし直後に想定外の落下を経験し、それは彼がそれまで享受していた現実に対する権威を暴力的に剥奪するものでもあった。つまりSachsは、Mariaを思惑通り操作できていると信じることができた無垢の状態からの「落下」を同時に経験するである。後に落下事故について友人Aaronに話すSachsは、しかし、Mariaの抱擁を得ることが本来の意図ではなく、実際には、彼の自殺願望がその姿を性欲に変えていただけだったと言い、落下事故を偶然ではなく想定済みの出来事だったとみなす。現実に対する権威を喪失したことを認めたくないがために、Sachsはタナトスという「他者の他者」を捏造するのである。本章は、偶有性によってパラノイアから「落下」させられたパラノイド的主体がそのトラウマを隠蔽するための新たなパラノイアの創生に駆り立てられるという「落下／跳躍」の動態的プロセスの考察を通して、そのプロセスのただ中にアメリカもまた身を置いていることを導きだす。

第2章 独立宣言に対する亡霊的応答——*Arc d'X*における「アメリカ」の死の遅延

「幸福の追求」という私的な欲望を書き込まれるために、アメリカの誕生だけでなく死をも不可避的に行行為遂行的に宣告する「独立宣言」。しかし*Arc d'X*において読者が「アメリカ」の死を目撃することはない。これは「独立宣言」の行為遂行性を脱構築するものにほかならない。本章ではまず、第1章でも確認されたパラノイア生成と落下の動態的プロセスが*Arc d'X*において「愛と自由」という人間の根本的な欲望の形を取ることを指摘する。Steve Ericksonの想像力に取り憑いているアメリカの起源的なトラウマによって、JeffersonとSallyだけでなく、「独立宣言」以降を生きる人々が「愛か自由

か」の二者択一の幸福の追求を迫られるとき、彼らはトラウマ的「他者の他者」を呼び込むことによって三角関係を構築する。その三角関係が熱病のように時空間を越えて連鎖・感染していくプロセスが亡霊的にアメリカの起源的なトラウマ「独立宣言」に接合されることによって、「アメリカ」の死は遅延される。つまりパラノイアの生成と落下の動態的プロセスが「独立宣言」の行為遂行性を脱構築するのである。

第3章 Oswaldの亡霊的なまなざし——*Libra*における喪の作業

「着想可能だが実際に起こり得ない」はずだった事件としてアメリカ史にトラウマを形成したJFK暗殺事件。*Libra*においてDon DeLilloの関心は事件の「真相」にではなくOswaldにある。逮捕直後に射殺されたOswaldは

「防犯上の理由」でWilliam Boboの偽名のもと埋葬される。この事実は、逆説的にも、Oswaldが適切に「埋葬」されていないことを暗示している。すなわち彼は実在した一個人としてではなく、Kennedy射殺事件の表象不可能なトラウマを覆い隠すための、歴史というメディア上に浮遊する記号として葬られたのである。ではどうしてこの埋葬方法が歴史的に不間とされてきたのか。その原因として本章では①Oswald自身の主体性、②Kennedy射殺事件以後を生きる「後世」、を検証する。とくに後者を考察するにあたっては、Oswald射殺時の映像が繰り返し再生される一視聴者のテレビ部屋の場面における「視線とまなざしの二律背反関係」を分析する。視聴者は死にゆくOswaldを見ることによって、それをKennedyの死がもたらしたトラウマ的衝撃に取って代わる表象可能な「他者の他者」として受容することができるはずだったにもかかわらず、この映像内におけるOswaldの死に際のカメラ目線によって、「対象のまなざしのトラウマ的衝撃」を経験させられる。視聴者の視線が構築した「悪党Oswald」を、Oswaldのまなざしが貫通した結果、視聴者はOswaldを「他者の他者」ではなく「他者」として見ることを強要されるのである。彼のまなざしは、このように、Kennedy以後を生きる「後世」にOswaldに対する喪の作業の契機を提供するものとして、本作品の向こうから常に読者をまなざしている。

第4章 広大な砂漠の只中で——*Underworld*におけるノスタルジーと崇高

集合的記憶として商品化された「50年代の豊かな消費生活」は、冷戦構造に依拠した神話に過ぎなかった。その神話／商品を消費することで、アメリカは「リアルなもの」を廃棄し、シミュラークラに自身を明け渡してしまった。ポスト冷戦期においてアメリカは、その廃棄したはずの過去が回帰してくるというオブセッションに苛まれている——。1951年ペナントレース最終戦のジャイアンツの歴史的勝利に始まり20世紀末の後期資本主義下の日常生活までを描くDon DeLilloの*Underworld*は、以上のようなお決まりのポスト冷戦期の表象には屈していない。むしろ今や時代錯誤と言っても過言ではない、このポスト冷戦期の視線を脱構築するのが本作品であると捉える。

「回帰するリアルなもの」は象徴的大他者を喪失したポスト冷戦期の人々が代わりに依拠しているという意味で、マスター・ナラティヴなきポストモダンにおいてパラノイド的主体が「発見」した「他者の他者」にすぎない。実際「廃棄されたリアルなもの」は本作品内においてはゴミという形式を取つて至るところで悪臭を放つが、パラノイドのノスタルジー的視線はゴミをも消費可能／表象可能な商品へとズラしてしまう。したがって、本作品内にはリアルなものなど登場しない——ただひとつ、広大な砂漠を除いては。本論ではこのパラノイド的視線の表象を中断する「他者のまなざしのトラウマ的な衝撃」の契機を、それを暗喩する二枚の絵画分析を通して考察する。また、DeLilloがパラノイド的視線を弾劾するだけではないということをエピローグの「ミニッツメイドの広告板に浮かび上がる死んだ少女の顔」というパラノイア考察を通して示す。

終章 批判的な視点からノスタルジックな視線へ

前章までで検証してきたことから、ナルシスト的パラノイドを「批判的な」距離をもって見る視点が各作品内に導入されていることについて二つの結論を導き出す。まずこの批判的な視点は読者が間違つても作品内のナルシスト的パラノイドに同一化しないための装置である。パラノイアは表象不可能な対象世界を一つの全体性へと還元表象するという点で決して美化されるべき方法ではない。しかし、それでもなお、パラノイアは抵抗の方法である——既存の枠組みに対してではなく、ポストモダン的状況に置かれたことによる不安や疎外感に対する抵抗の方法である。この意味において作品内に設けられた「批判的な」視点は読者に対し、パラノイアという方法から疎外されているということは自己の生存をかけた闘争からの疎外をも意味することを突きつける。そして、各読者がこの「批判的な」視点を「ノスタルジックな」視線へとズラすことを奨励するのだ。なぜならそれは、対象世界の表象不可能性を認識しつつ「それでもなお」表象不可避性を受け入れることで

「落下」という崇高の瞬間を婉曲的に演出することの責任を引き受けることに他ならないからである。

論文審査の結果の要旨

本論文“Beyond the Poetics of Paranoia: The Postmodern Sublime and Its Residue in Contemporary American Fiction”は、いわゆる「大きな物語」が破綻したポストモダン的状況下において、アイデンティティを喪失し断片化した表層的イメージと戯れるスキゾフレニアが前景化される一方で、どこかに隠蔽された「大きな物語」が存在し、他者に操作されているというパラノイア的思考が依然として根強く残っているという矛盾に着

目し、主要な現代アメリカ小説の主体が両者の間で分裂し揺れ動くさまをダイナミックに描出しようとした非常に優れた労作である。本論文の独創性は、これまでのポストモダン文学研究においてほとんど議論の俎上に載せられることのなかったスキゾフレニアとパラノイアの錯綜を丹念に解きほぐし、通常のパラノイアとは区別してポストモダン・パラノイアと命名された後者の条件成立を、ノスタルジーという概念を導入することにより、精緻に論述しようとしたところにある。

序章において本論文は、スキゾフレニアとパラノイアは決して対立概念ではなく、ポストモダンのパラノイアが捏造する枠組みには常に／すでに分裂症的痕跡が内在しているがゆえに、両者は表裏一体の関係にあるという創見に満ちた考察を提示し、立論の視座を明確にしている。そのうえで執筆者は、「大きな物語」への不信感を抱く分裂症的主体がいかにしてパラノイアという「大きな物語」を信じることができるのか、ポストモダンの主体がパラノイアによって断片化した現実の再統合を捏造するには、一体いかなるメカニズムを介する必要があるかを解明しようとする。その際、援用されるのが、スラヴォイ・ジジェクの「他者の他者」という概念である。イーハブ・ハッサン、ティモシー・メリー、ジャン＝フランソワ・リオタール、フレドリック・ジェイムソン、ジャック・デリダなど、先行するポストモダン文学・文化のパラノイア言説に関する論考を精査したうえで、執筆者は、ポストモダンの主体が彼らを虜げることによってパラノイアを成立させる他者を、ジジェクにならって「他者の他者」として指定する。そして、こうした「他者」ならぬ「他者の他者」こそが、窺い知ることのできない「何かによって自分たちが操作されている」という彼らの依存する「大きな物語」を裏書きし、ポストモダン的状況に対する免罪符として機能していることを詳細に論証していく。

各章において取り上げられたテキストは、代表的なポストモダン・アメリカ小説、ポール・オースターの『リヴィアイアサン』(1992)、スティーヴ・エリクソンの『Xのアーチ』(1993)、ドン・デリーロの『リブラ』(1988)、『アンダーワールド』(1997)の4作である。これらの膨大なテキストを読み解くことにより、本論文は、パラノイア的気質を多分に含

み持つパラノイドたちの揺らぎを詳細に分析し、パラノイアという安定した「大きな物語」に固執し続ける彼らへの批判的な視点を探り当てる。こうしたパラノイアに対する両義的な視点の導入により、パラノイドに対する感情移入、自己同一化が妨げられる一方で、彼らへのノスタルジアを掲き立てるこうした視点を通して、読者には、捏造されかつては稼働していくはずの「大他者」や「大きな物語」がもはや機能せず、幻想でしかなかつたことが逆に浮き彫りになっていく。

第1章、「約束された「アメリカ」の脱臼—『リヴァイアサン』における「落下」」は、ポール・オースターの問題作『リヴァイアサン』に重要な契機として描き込まれたサックスの落下事故に焦点を絞り、偶然性によってパラノイアから転落したパラノイド的主体が、そのトラウマを隠蔽するためにタナトスという新たなパラノイアの創出に駆り立てられるというプロセスを、「アメリカ」という文脈を踏まえつつ詳細に論述している。

次に第2章、「独立宣言に対する亡霊的応答—『Xのアーチ』における「アメリカ」の死の遅延」は、スティーヴ・エリクソンの代表作を取り上げ、パラノイア生成のプロセスが、「愛と自由」という人間の根本的な欲望と密接に絡み合うさまを巧みに描出している。ジェファソンやサリーをはじめとする登場人物たちは「愛か自由か」の二者択一の「幸福の追求」を迫られるとき、トラウマ的な「他者の他者」を呼び込むことで三角関係を構築していく。まさにこうした三角関係が時空間を越えて亡霊的に感染していくプロセスこそが、アメリカの起源的なトラウマ「独立宣言」と接合されたときに、その行為遂行性が脱構築されていくさまを多様な角度から論証している。

第3章、「オズワルドの亡霊的なまなざし—『リブラ』における喪の作業」は、JFK暗殺事件の表象不可能なトラウマを覆い隠すために、記号として葬られたオズワルドに焦点を絞り、彼の射殺時の映像が繰り返し再生される一視聴者のテレビ部屋の場面における「視線と眼差しの二律背反関係」について綿密な分析を加えている。その結果、視聴者は死にゆくオズワルドを見ることにより、JFKの死がもたらしたトラウマ的衝撃に取って代わる表象可能な「他者の他者」として受容することができるはずだったにもかかわらず、

死に際に彼の映像が投げかける眼差しにより、喪の作業を必要とする「他者」として見ることを強要されるという鋭い洞察が導き出される。

前章を踏まえ、同じくデリーロの長大な代表作を取り上げた第4章、「広大な砂漠の中—『アンダーワールド』におけるノスタルジーと崇高」は、「ポスト冷戦期においてアメリカは、廃棄したはずの過去が回帰してくるというオブセッションに苛まれている」という一見妥当に思える言説こそが、マスター・ナラティヴを欠いたポストモダンにおいてパラノイド的主体が発見した「他者の他者」に過ぎないことをまず明らかにし、こうしたパラノイド的視線の表象を中断する契機を、作中に登場する二枚の絵画と広告板に浮上する亡霊の分析を通じて鮮やかに浮き彫りにしている。

本論文の核心をなすこののようなパラノイドに対する緻密な議論を通して、何らかの枠組みをじかに信じることによって現実感覚を獲得するナルシスト的パラノイアとは異なり、ポストモダン・パラノイアは、ノスタルジアという緩衝装置を介してはじめて成立することが明らかになる。そのうえで、ポストモダン的状況下において断片化されたものとして経験される自己や世界を馴致するために、読者はナルシスト的パラノイドという「他者の他者」を想定し、その視点を批判的に借用することにより、現実を一貫性のある物語がかつてあった世界として経験するという結論が導き出される。ナルシスト的パラノイドを批判的な距離をもって見る視点が各テクスト内に挿入されていることを踏まえ、読者がこの批判的な視点を「ノスタルジックな」視線へと接合させることにより、それがポストモダン的状況に対する一定の「抵抗の方法」として機能し得るという本論の主張は、ポストモダン文学の意義を積極的に打ち出したものとして説得力に富む。

このように本論文は、一見矛盾するスキゾフレニアとパラノイアの狭間でダイナミックに揺れ動くポストモダンの主体が孕む問題系を丁寧に抽出し、「大きな物語」をめぐるノスタルジアを孕んだ「他者の他者」としてのポストモダン・パラノイアを実証的に描出することにより、とかく平板に捉えられがちなパラノイア表象に新たな準拠枠を提示した点において高い評価が与えられる。とりわけ、従来トマス・ピンチョンに専ら適用されてき

たパラノイア表象研究の準拠枠を拡げ、ポール・オースター、スティーヴ・エリクソン、ドン・デリーロといった多様な現代アメリカ作家の視座から、さらに広いコンテキストにおいてポストモダン・パラノイアの詩学を探求し、現代アメリカ文学研究に新機軸をもたらした点において学術的意義を認めることができる。さらに特筆すべきことは、本論文は、着想が斬新で独創性に富んでいるのみならず、序論から結論へと論を導く論証の手続きが手堅く、論述には首尾一貫した問題意識と説得力が備わっていることである。ポストモダン文学を読み解くのに必要な概念規定を明確に示したうえで、広大な射程を視野に入れつつ、一つ一つ論点を押さえながら綿密に論述を進めていく本論文には、筆者の思考の跡を窺わせる厚みのある考察が随所に挿入されており、学術論文として読み応えがある。

以上の評価を踏まえ、論文審査においては、審査委員から次のように質疑がなされた。第1章のポール・オースターの『リヴァイアサン』論において本論文の核となる視座の一つとして論じられたベンジャミン・サックスの「落下」をめぐる考察は、論文の後半において強調されるノスタルジーについての議論といかに接合されていくのか。論文タイトル、『パラノイアの詩学を越えて—現代アメリカ小説におけるポストモダンの崇高とその残余』のサブタイトルについての説明が不十分で、特に「残余」についての議論が乏しい。引用における強調、並びに書誌の記載方法に改善の余地があるといった点である。これらの指摘に対して、執筆者から、最終的に論文タイトルを提出したのち、3年間の執筆の過程において考察を進めていくうちに、新たな論点が浮上し、論文の力点を若干軌道修正した部分があったとの説明がなされた。

しかしながら、以上指摘された問題点は、本論文の学術的価値を本質的に損なうものではない。本論文で示された論考は、ポストモダン・アメリカ文学におけるパラノイア／スキゾフレニア表象研究のアプローチの地平を拡げ、新たな方向性を模索するものとして、日本アメリカ文学学会全国大会等における口頭発表においても高い評価を得ており、本論文の一部は既に審査を経て学会誌に掲載されている。

なお本論文は、各審査委員が一致して認めるように、実に明晰でこなれた達意の英文で

書かれており、執筆者が卓越した英語運用能力の持ち主であることを窺わせる。この点においても、執筆者がこれから気鋭の研究者として国際的に研究成果を積極的に発信することにより、アメリカ文学・文化研究の発展に大いに寄与することが期待できる。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。